

令和6年度 校内研究実施計画書

1 研究主題及び教科

| | |
|-------|---|
| 研究主題 | 自ら問いをもち、学び続ける子をめざして ～地域に学ぶ生活科・総合的な学習の時間を通して～ |
| 教科・領域 | 生活科・総合的な学習の時間 |

2. これまでの研修と社会的要請

(1) これまでの研修の成果と課題から

本校は3年前より算数科を切り口に研修を進めてきた。そこでは子どもたちが自ら学ぶことや共に学び合うことが目指され、ICTの効果的な活用や発問・教材の工夫等、様々な視点から授業を捉え直し、目指す子ども像の実現に努めてきた。このような取組から、自分の考えを持てるようになってきたなど一定の成果は見られたものの、図表等を用いて自分の考えを表現することが苦手であったり（令和5年度学力学習状況、みえスタディチェック結果より）、話すことに対して消極的であったり（本校独自で行った児童アンケートより）するなど、表現力の課題も残る。また、授業中や集会等における私語が多いことも懸念されることから、学びに向かう態度や力を高め、学習に対して受け身になるのではなく、自ら進んで学ぶ力を育成する必要があると考えられる。そのためには、教師による「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が必要である。まだまだ教師主導で授業を進めてしまったり、日々の業務に追われて教材研究を十分に行えなかったりするなど、教師が教材研究に集中できる環境作りや教師による授業改善の余地が大いにあると考えられる。

以上のことから、子どもたちにつけたい力は大きく以下の2点であると考えられる。

〈子どもにつけたい力〉

- ① 自ら学ぼうとする力
- ② （図表等を用いて）自分の考えを表現する力

これらの力を身に付けさせていくためには、子どもたちが自ら課題を見つけ、その課題解決に向けて情報収集し、整理・分析したことをまとめ・表現できるような授業づくりを教師が行っていく必要があると考えられる。

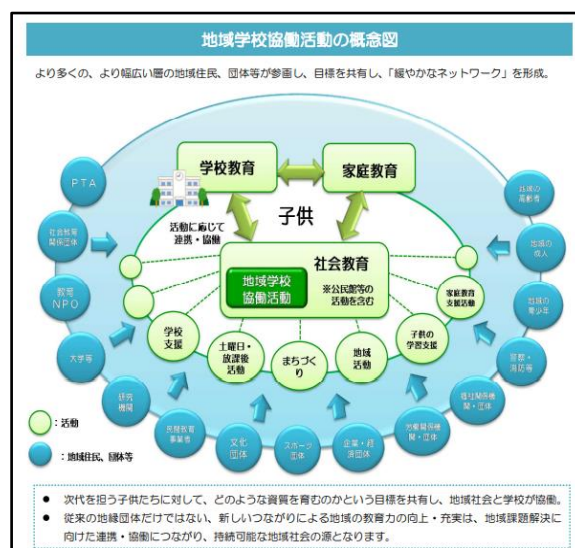
(2) 地域との関わりから

本校は地域教材に恵まれ、地域の人々も学校の教育活動に対して非常に協力的である。そのため、各学年例年決まった活動が継続的に行われている。しかし、その一方で地域学習の見直しも求められている。令和5年度学校関係者評価においては以下の点が指摘されている。

- ① 地域学習がまだ定着しておらず「出前授業」で終わっている。
- ② 先生たちがどんなことを学ばせたいのかという目標が依頼者に伝わってこない。
- ③ 子どもたちがどんなことを学んだり考えたりしたのか、地域にもっと伝わるとよい。

①では、地域学習の在り方や位置付けが指摘されており、その前後の学びの充実が求められている。出前授業で終わらないようにするためには、子どもの学び方がどうあるべきかを検討していく必要があると考えられる。

②では、「地域学習で何を学ばせたいのか」を地域と学校が共有することが求められ、③では、その学びが地域に還元されることが求められていると考えられる。これらのことから、地域と学校との連携のあり方が問われているといえる。地域との協働の視点に関しては、現行の学習指導要領においても強調されており、文部科学省（2019）は、「地域学校協働活動」を提案し、学校が家庭や地域と連携・協働しながら取り組む外部連携の構築について言及している（図表1）。「地域学校協働活動」とは、「地域の高齢者、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、『学校を核とした地域づくり』を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動のこと」である。これまでの学校と地域の関係が地域による「支援」という一方の関係になっていた枠組みを捉え直し、学校と地域が「連携・協働」し双方向の関係を築くことが目指されている。



以上のことから、これまでの地域学習の在り方を見つめ直し、前年踏襲による「活動ありき」の活動になってしまわないよう、学校と地域が子どもたちにつけたい力や教育課程を共有し、子どもの学びに即した「子どもありき」の活動を「連携・協働」して展開していく必要があると考えられる。

3. 今年度の研修の方向性

(1) 主題設定の理由

① 総合的な学習の時間のねらい

総合的な学習の時間では、身の回りにある様々な問題状況について、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決していく児童の姿が目指されている。問題をよりよく解決するために、児童は地域に出かけたり、様々な体験活動を行ったり、多くの方と出会ったりして学んでいく。このような「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」という考え方は、[平成10年学習指導要領改定](#)により総合的な学習の時間が創設されて以来、大切にされている。[平成29年告示の小学校学習指導要領総合的な学習の時間編（以下、現行の学習指導要領）](#)では、その目標が改善され、ねらいや育成を目指す資質・能力が明確化された。以下、現行の学習指導要領に示されている総合的な学習の時間の目標である。

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

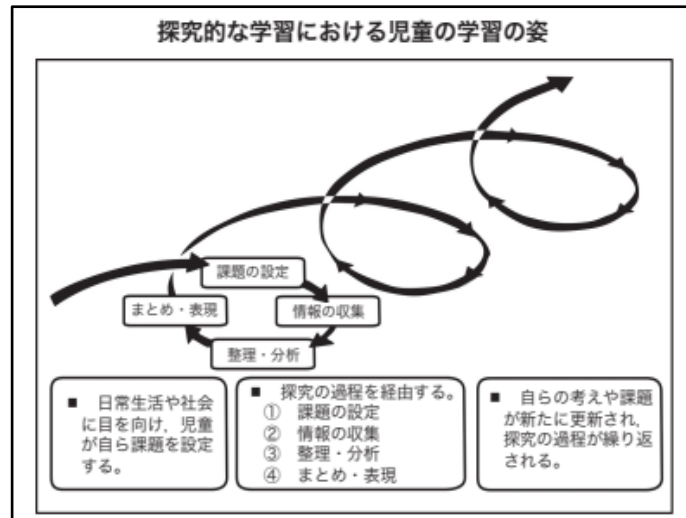
(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。

(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

[探究的な見方・考え方](#)とは、「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けること」である（文部科学省、2017）。このような見方・考え方を働かせるためには、探究的な学習の過程を一層充実することが求められている。

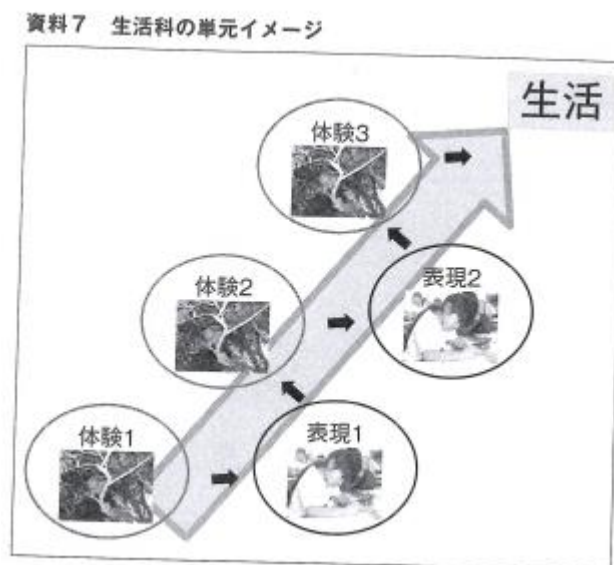
探究的な学習の過程では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連のサイクルが発展的に繰り返される。学習指導要領において、その「探究的な学習における児童の学習の姿」が具体的に示されている（図表2）。



図表 2 探究的な学習における児童の学習の姿（文部科学省, 2017）

② 生活科で大切にしていきたい視点

生活科では、体験活動が質的に高まっていくことが望まれる。ただ単に体験活動を繰り返し行うのではなく、話し合いや交流、伝え合いや発表などの表現活動が、単元に適切に位置付けられることが大切である。この体験活動と表現活動の相互作用が学習活動を質的に高めていく（資料 7：田村学、2017『カリキュラム・マネジメント入門』より）。



③ 教師の生活科・総合的な学習の時間に対する問題意識

研究を始める前に、教師たちのこれまでの実践や生活科・総合的な学習の時間に対する問題意識を[スプレッドシート](#)で共有した。そこからあがってきた問題意識としては以下の通りである（スプレッドシート「研修の記録」より一部抜粋）。

- ・ 生活か総合で何を行うのか、何をすべきなのかが詳しく分かっていないです。
- ・ 地域教材を使って、子どもが主体となる総合の時間を展開していく経験が少ないので不安と楽しみがある。どのように深い学びに繋げていくのか、そのためのサイクルを確立していきたい。
- ・ これまでは地域を題材に一年間取り組んだことがなく、総合の時間はその時に重なった行事や何をしようか深く考えられていなかったように思う。地域とどう繋がっていくか、地域の題材をどう見つけていくか
- ・ 子どもが課題を持ち、解決のために取り組んでいくという具体的な授業のイメージがまだわいていません。
- ・ 探究するにふさわしい問いをどのようにもたせるか。そこからどう深めていくか。

教師たちの問題意識としては様々なものが見られたが、その中でも、総合的な学習の時間をどのように進めていけばよいか、どのような授業を行うとよいか、地域とどのように連携をとっていくのか等、総合的な学習の時間についての問題意識が多く見られた。また、4月の全体研修会では、研修主題にあるように、「自ら問いをもつ」とはどのような姿なのか、教師の手立てとしてはどのようなものが考えられるのか等、問いをもつことに対する意見が多くみられた。

以上のことから、今年度の研修主題を「自ら問いをもち、学び続ける子をめざして」と設定する。その切り口となる教科・領域を生活科・総合的な学習の時間とし、地域と連携を図りながら学習を深めていく。そのため副主題を「地域に学ぶ生活科・総合的な学習の時間を通して」とした。上述したように、教師の生活科・総合的な学習の時間に対する困り感は大きいと考えられるため、教師たちで困り感を共有しながら協働して研修を深めていきたいと考えている。

（2）めざす子どもの姿

- ・ 自ら問いをもつ子ども
- ・ 問いを追究する子ども

○ 「自ら問いをもつ」

子どもは問いをもとに学習を進めていく。問いは「問いをもちましょう」と言われてもてるものではない。目の前の事実や事象から問いをもてるようにさせたい。また、問いは発展

的に変化していくと考える。初めから探究にふさわしい問いが出てくるとは限らない。子どもたちの問いが連続的・発展的になっていくように、教師の役割も重要となってくる。

○ 学び続ける＝探究的に学ぶ

（総合）探究のサイクルを回し続ける→探究的な学習の過程を意識

（生活）気づき→表現の繰り返しで体験活動の質を高めていく。

これらの学びを通して、自ら問いをもち、その解決に向けて他者とともに粘り強く取り組む姿勢や力を身につける。

「学び続ける」には、期間という量的な視点だけでなく、学問的に学ぶ（深く学ぶ）という質的な視点も含む。

4. 主題達成のための具体的な取組（大切にしていきたいこと）

（1）子ども観・授業観の転換

| 子ども観 | 授業観 |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 子どもはよくなるうとしている。 子どもは本来能動的な学習者である。初めから受け身な存在ではない。 子どもには、自ら探究し、内から育つ力がある。 | <ul style="list-style-type: none"> 学習の主体者は教師ではなく子どもである。 子どもがどのように学んでいるかという子どもの事実に立つ。 子どもと共に創る授業 |

（2）カリキュラム・マネジメント

生活科・総合的な学習の時間を軸に、各教科等の学びを子どもの学びの必然に沿うように再構成し、子どもが学びを自分事として捉えられるようにする。また、子どもにつけたい力を明確にする。

（3）子ども主体の授業づくり

子どもにとって探究しがいのあるもの（教材）

- 子どもの興味・関心を大切にする。
→ 興味・関心は認知的ずれによって引き出される。
- 地域の特色や人材を生かせるもの
- 自己の生き方につながるもの

（4）探究的な学習の過程を意識する。

○ 体験活動だけで終わっていくことがないように。

例えば地域学習で考えた場合、毎年行われている地域学習が前年踏襲にならないように、それらの学習や活動が探究的な学習の過程のどこに位置付いているのかを意識する。課題を設定するための活動なのか、情報を収集するための活動なのか・・・等

○ まとめて終わり・まとめたことを発表して終わりにならないように。

情報収集したことをまとめて終わったり発表し合って終わったりするのではなく、収集した情報は整理・分析することが大切である。場合によっては、そこから新たな課題が生まれ課題の設定にサイクルが戻ることもある。

(5) 教師自身が探究する。

まずは教師自身が探究することが大切である。その中に、子どもに出会わせたい・考えさせたい事実（事象）が生まれてくる。それを授業づくりに生かす。教師が辿った探究的な学びの過程が単元（授業）づくりにつながる。

(6) 教師が地域を知る。

(5) ととも重複するが、まずは教師が地域を知ることが大切である。そのためには教師自身が地域を歩き、そこにある地域の「ひと・もの・こと」と出会うことが必要となってくる。地域教材を1人で抱え込むのではなく、学年集団や学校全体で共有していくことも大切であるため、地域に出かける際は教師同士声を掛け合うことも大切にしていきたい。

(7) 子どもの学びを記録する。

子どもの学びを大切にしながら単元（授業）を進めていくためには、子どもが「何を学んだのか」「どのように学んでいるのか」「どんなことを学びたいのか」等を教師が把握する必要がある。そのために、子どもの学びの記録をポートフォリオ（総合ノートやワークシート、端末アプリ等）に残しておくことが大切である。このような取組は教師の次回以降の授業作りに役立つだけでなく、子どもたち自身も自己の学びを振り返ることができ、自己の学びを調整する力につながることも期待できる。

(8) 地域素材を生かしたテーマ設定

学習支援ボランティア一覧表等をもとに、地域素材を生かしたテーマを設定する。新たに地域教材を発掘することもよい。

(9) 学んだことを表現する場（「まとめ・表現」の段階）の設定（地域への還元も含む）

| 〈日々の授業で〉 | 〈地域への還元〉 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 問いについて話し合う。【話す・聞く】 ・ 書いてまとめる。【書く】 → 国語科との関連を意識し、子どもの学びの必然性に沿った活動となるとよい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 集会で学習発表会（生活科・総合的な学習の時間での学び）をする。 → 発表する学年に合わせてお世話になった地域の方を招いてはどうか。 ・ 地域の方へのお礼の会を開催して、各学年学んだこと（生活科・総合的な学習の時間）を発表する。（昨年度、3年生が「稲生じまんをしよう」というテーマで学年単位でお礼の会を実施） |

3. 研究の方法

(1) 年間の教育課程の全体像を把握する

年間にすでに位置付けられている学校行事や市・地域の行事、県や市の作品募集等、動かしがたいものを確認する。そして、国語科や社会科等、各教科等において1年間で身に付ける内容を把握する。これらがカリキュラム・マネジメントに大きく関係してくる。

(2) 地域を知る

子どもたちに地域のことを取り上げて学習を進めさせる上で、まずは教師自身が地域へ出かけ、校区の地域的資源を知ることが大切である。それらを教材化していく段階では、何度も地域へ足を運び、詳しい人に聞き取りを行ったり、実際に見に行ったりすることが必要となってくる。

(3) 生活科・総合的な学習の年間のテーマを決定する。

年間の教育課程の全体像を把握し、地域にある教育的資源を知ることができたら、それらを活用できるような生活科・総合的な学習の時間の1年間のテーマを決める。例えば5年生では、社会科で「米作りがさかんな地域」を学習すること、地域の方々の協力のもと田植えや稲刈り等が教育課程に位置付けられていること、地域には田んぼが多いこと等から「稲生の米作り」を1年間のテーマとすることが考えられる。

(4) カリキュラム・マネジメントをする

生活科・総合的な学習の時間と各教科等を効果的に関連づけていくためには、カリキュラム・マネジメントが必要となってくる。カリキュラム・マネジメントについては、小学校学習指導要領総則において以下の3つの視点が示されている。

- ① 児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと
- ② 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと

このように、子どもの実態、めざす子ども像、各教科等で身につける内容、地域の人的・物的資源等を考慮しながら、生活科・総合的な学習の時間を軸として、教科横断的な視点で教育内容を効果的にカリキュラム・マネジメントし、配列し、年間の教育課程を作成する。

(5) 実践する

実践をしていく上で、以下の点を大切にしていく。

① 元々位置付けられている地域教材のさらなる活用

※ もちろん、新たに地域教材を発掘することも大切

② 探究的な学習

探究的な学習とするために、次の一連の問題解決的な活動が発展的に繰り返されるよ

うな学習活動を展開する。

- (ア) 課題の設定…体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ。
- (イ) 情報の収集…必要な情報を取り出したり収集したりする。
- (ウ) 整理・分析…収集した情報を、整理したり分析したりして思考する。
- (エ) まとめ・表現…気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。

③ 各教科等で習得した知識や技能の活用や定着

総合的な学習の時間における問題解決を図るためのツールとして、各教科等で身に付けた知識・技能が活用できるように、各教科等の授業を有効的に位置付ける（カリキュラム・マネジメント）。

4. 研修日程

令和6年度 稲生小学校校内研修日程（案）

2024. 5. 15時点

| 日程 | 行事 | 研修内容 | 学年 | 備考 |
|--------------|-----------------|------------------------------------|----|--------------------|
| 4/3 (木) | 第1回全体研修会 | 1. 学級開き 2. 今年度の研修の概要 3. 校長より | | |
| 4/10 (水) | 第2回全体研修会 | 【講義・演習】地域素材を生かした単元（授業）づくりについて | | 三重大学市川先生来校 |
| 6/6 (木) | 第3回全体研修会 | 提案授業①（研修） ※ 指導主事来校 | 3年 | 3年事後検 |
| 6/26 (水) | 第4回全体研修会 | 提案授業②（人権） | 1年 | 1年事後検 |
| 8/5 (月) | 夏季校区研修会AM（旭が丘小） | | | |
| 8/7 (水) | 第5回全体研修会 | ・フィールドワーク ・単元構想 ・2学期の実践について | | 年間指導計画見直し |
| 8/28 (水) | 第6回全体研修会AM | ・学調分析等 | | |
| 9/26 (木) | 第7回全体研修会 | 提案授業③（研修） ※ 指導主事来校 | 5年 | 5年事後検 |
| 10月 | | 各自実践 授業を見合う | | 運動会 |
| 11/6 (水) | 第8回全体研修会 | 提案授業④（人権） | 4年 | 4年事後検 |
| 11/28 (木) | 第9回全体研修会 | 提案授業⑤（人権） 3学期の実践について | 6年 | 6年事後検 年間指導計画見直し |
| 1/23 (木) | 第10回全体研修会 | 提案授業⑥（研修） ※ 指導主事来校 | 2年 | 2年事後検 |
| 2/19 (水) | 第11回全体研修会 | 研修、人権の成果と課題検討 | | |
| 3/5 (水) | 第12回全体研修会 | 来年度の方向性検討 | | 職員会議と被っている |

(1) 提案授業について

- ・ 1年間を通して、各学年で提案授業を行う。
事前説明会→提案授業→事後検の流れ
※ 事前説明会の日は直前に設定（30分程度）する。
- ・ 基本的には、探究的な学習の過程における「整理・分析」の場面（問いに対して追究している様子）を取り上げてはどうか。
- ・ 授業の良し悪しではなく、子どもの学びの姿から授業の在り方を考える。

(2) 全体研修会の持ち方（人権との関連）

- ・ 全体研 → 研修3本＋人権3本＝計6本
学年部研 → 研修3本＋人権3本＝計6本
◇ どの学年も研修と人権の提案授業は行う形とする。

(3) 学んだことを表現する場（「まとめ・表現」の段階）の設定（地域への還元も含む）

〈日々の授業で〉

- ・ 問いについて話し合う。【話す・聞く】
- ・ 書いてまとめる。【書く】
→ 国語科との関連を意識し、子どもの学びの必然性に沿った活動となるとよい。

〈地域への還元〉

- ・ 集会で学習発表会（生活科・総合的な学習の時間での学び）をする。
→ 発表する学年に合わせてお世話になった地域の方を招いてはどうか。
- ・ 地域の方へのお礼の会を開催して、各学年学んだこと（生活科・総合的な学習の時間）を発表する。（昨年度、3年生が「稲生じまんをしよう」というテーマで学年単位でお礼の会を実施）